

『RŌMAJI ZASSI』に邦訳されたグリム童話について —日本初のグリム童話邦訳をローマ字で訳出した訳者について—

野口芳子
(武庫川女子大学英語文化学科)

Grimm's Fairy Tales in the Rōmaji Alphabet: The Translations in the *Rōmaji Zasshi* and Their Translators

Yoshiko Noguchi

*Department of English, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

The first Japanese translation from Grimm's Fairy Tales for the general public (as distinct from translations in English textbooks) was 'The Little Shepherd Boy' (KHM152) in the magazine *Rōmaji Zasshi* in April 1886 (vol. 1, no. 11), translated by Kin-Ichiro Katayama into Rōmaji (Roman letters used to represent Japanese words). Another tale, 'The Straw, the Coal and the Bean' (KHM18), was translated by Chusuke Imura in *Rōmaji Zasshi* in June 1887 (vol. 2, no. 25). However, details about these translators (besides their names in Rōmaji), their motivations, and the original source language (English or German) have been unknown.

The present author has clarified these details. The German teachers Rudolf Rehmann and Kajō Nakayama motivated the translations, which were from the German, and the forensic medicine specialist Kuniyoshi Katayama (Kin-Ichiro's brother) probably inspired their translation into Rōmaji. This paper established that several Rehmann Society members were engaged in translations of Grimm's Fairy Tales. These new discoveries will contribute to the research on the reception of Grimm's Fairy Tales in Japan.

1. 序論

グリム童話が最初に日本語に訳されたのは、英語教科書の抄訳¹⁾以外では、1886年4月刊行の『RŌMAJI ZASSI』(1冊11号)であるといわれている²⁾。グリム童話 KHM152³⁾「牧童」が、「HITSUJIKAI NO WARABE」という題で KATAYAMA KIN-ICHIRO によってローマ字で訳されている。『RŌMAJI ZASSI』には1887年6月刊行の2冊25号にもう1話、KHM18「藁と炭とそら豆」が「MAME NO HANASHI」という題で IMURA CHŪSUKE によって訳出されている。

ローマ字で訳出された2話については、訳者についても、翻訳の動機についても、使用原本の言語についても不明のままである。この論文の目的は、それらの詳細を明らかにすることと、なぜこの2話が選ばれたのか、その理由を探ることである。

2. KHM152 「牧童」のローマ字訳

1) KHM152 「牧童」のあらすじ

賢い牧童がいるという噂が、王の耳に届く。王は牧童を呼びつけて、3つの問いに答えることができれば、お前を養子にして城に住まわせてやるという。1番目の問いは、「世界中の海には水が何滴あるか」だ。牧童は王に「地球上の川をすべてせき止めてほしい。まだ数えていない川の水が、1滴も海に注がないようにしてくれたら、海に水が何滴あるか答える」という。2番目の問いは「空にはいくつ星があるか」だ。牧童は大きな白い紙を要求し、そこに羽ペンで「目に見えないくらい小さな点を数えられないくらい多く描き」、空の星はこの紙の点と同じ数だけあるという。3番目の問いは「永遠は何秒か」だ。牧童は「ヒンターポンメルンの国にダイヤモンドの山がある。山は平坦な道を1時間歩いたほどの高さ、幅、奥行きがある。そこに百年に1度、小鳥が飛んできて嘴を研ぐ。この山が完全になくなったら、永遠の最初の1秒が過ぎる」と答える。王は牧童の賢さに感服して、約束通り、彼を自分の養子にして城に住まわせる⁴⁾。

2) KATAYAMA KIN-ICHIRO 訳「HITSUJIKAI NO WARABE」

KATAYAMA のローマ字訳は、原文にほぼ忠実な訳だが、次のような誤訳も散見する。「目に見えないくらい小さな点を数えられないくらい多く描いた」⁵⁾というところを「kami no omote wa uchiyogorete mirubyō mo arazu」⁶⁾と訳している。つまり「小さくて見えない」点を、「汚れて見えない」点と誤訳しているのである。さらに「この山に百年に1度小鳥が飛んできて」⁷⁾という表現を「Ito mo hisashiki inishie yori toshidoshi kono yama ni kitaru tori arite」⁸⁾と訳している。つまり、鳥が来るのは「百年に1度」なのに、「年に1度」と誤訳しているのだ。しかし誤訳はこの2カ所だけで、あとは原文に忠実な訳である。なお、この話の出典がグリム童話であることは、明記されていない。

3) KHM152 「牧童」(Das Hirtenbüblein)について

この話は初版にはなく、第2版(1819)から152番に挿入されたもので、決定版(1857)までその番号で収められている。ルードヴィッヒ・アウエルバッハー (Ludwich Auerbacher 1784-1847)がバイエルン地方の「なぞなぞ笑話」(Rätselschwank)を書きとって、グリム兄弟に送ったものである⁹⁾。アウエルバッハーもこの話を自著『青少年のための小冊子』(Büchlein für die Jugend, 1834)に収めている。そこでは質問は、1つ目が空の星の数、2つ目が海の水滴の数、3つ目が古い木々の葉の数である。この話は類話が数多く存在するが、最も古い出典はストリッカー (Stricker, 筆名で姓なし)が僧侶の笑話を集めた『プファフェ・アミス』(Pfaffe Amis 1240?)であろう、とグリム兄弟が注釈書に書いている¹⁰⁾。ストリッカーは聖職者に一杯食わせる貧しい庶民の話を収集したという。貧しい身分の牧童が、その知識が評価されて王の後継者になることなどあり得ない。それゆえ、この話は封建社会の硬直した現実を痛烈に風刺した「笑話」なのである。

2. KHM18 番「藁と炭とそら豆」のローマ字訳

1) KHM18 「藁と炭とそら豆」のあらすじ

貧しい婆さんの台所から抜け出した藁と炭とそら豆は、一緒に旅に出てよその国に行くことにする。小さな小川の畔に来ると、橋がない。藁がこちらの岸からあちらの岸に寝そべって、炭にその上を渡るよう促す。炭は真中まで渡ると、下を流れる水音に怯えて足がすくみ、立ち止まってしまう。すると炭の火が藁に移り、藁は2つに切れて水に落ちてしまう。炭もまた一緒に水中に落ちてしまう。岸にいたそら豆がこれを見て大笑いし、笑いすぎて腹がはじける。偶然、岸で休憩していた仕立屋がそら豆を縫い合わせてくれたので、そら豆は命拾いする。しかし、仕立屋は黒糸を使ったので、このときから、そら豆には黒い縫い目が目につくようになったのである¹¹⁾。

2) IMURA CHŪSUKE 訳「MAME NO HANASHI」

IMURA CHŪSUKE のローマ字訳は、直訳ではなく意識であり、改変されたものだ。橋代わりにと寝そべった藁の上を渡る炭が、「水音に怯えて立ち止まったので」、藁に火がつき、2人ともおぼれてしまうという原文の内容は¹²⁾、「" Ana osorosiki koto yona!" to iitsutsu noru ya inaya, wara wa omoki ni taekane ugoku totan, keshizumi wa massakasama ni suichū ye otosaretari」¹³⁾。怯えながらも消し炭は藁の橋を渡ろうとするが、橋の上に乗るや否や藁は消し炭の重さに耐えかねて動いてしまう。その拍子に消し炭は真逆さまに水中に落ちてしまう。つまり、炭が落ちた原因を「水音に対する怯え」から「体重の重さ」に変更しているのである。それを見たそら豆は笑いすぎて腹がはじけて、原文では「仕立屋」に縫い合わせてもらうが、ここでは「旅の医者」に縫い合わせてもらう。つまり、そら豆の命を救った者を「仕立屋」から「医者」に変更しているのである。なお、この話の出典がグリム童話であることは明記されていない。

3) KHM18 「藁と炭とそら豆」 (Strohalm, Kohl und Bohne) について

この話は手書き原稿である初稿では5番目に、初版からは決定版までは18番目に置かれている。カッセルのドロテア・カタリーナ・ヴィルト (Dorothea Catharina Wild) から口承で収集した話である¹⁴⁾。ブルクハルト・ヴァルデス (Bruckard Waldis, 1490-1556/7) の『イソップ』 (Esopus 1548) の話を大幅に書き直したものとグリム兄弟は推測している¹⁵⁾。そら豆の避けた腹を黒糸で縫う人物は、ヴァルデスの話では靴屋になっている。多くの類話が存在するが、そら豆にはなぜ黒い筋がついているのかを説明する由来のエピソードだけは、どの類話にも含まれている¹⁶⁾。最も重要な箇所だからであろうか。

3. 「HITSUJIKAI NO WARABE」の訳者 KATAYAMA KIN-ICHIRO について

1) KATAYAMA KIN-ICHIRO の漢字名とその経歴

ローマ字雑誌におけるグリム童話の訳者、KATAYAMA KIN-ICHIRO と IMURA CHŪSUKE に関しては、発見者の川戸道昭が「残念ながら彼らの漢字名や経歴については何もわかっていない…当時の東京帝国大学や高等中学校の名簿などを調べてみたが、そうした名前は見あたらなかった。彼らの経歴その他に関する詳しいことは今後の研究にまたなければならない¹⁷⁾」と述べているように、これまでその消息は不明であった。

調査の結果、筆者はその漢字名と経歴を明らかにすることができた。KATAYAMA KIN-ICHIRO は、英語版の人名事典「WHO'S WHO IN JAPAN」にその名前が掲載され、下記のように紹介されている。

Katayama, Kin-ichiro, Pres., Kyushu Seisakusho Co., Dir. and Chief Eng. of the Takai Steel Works; b. in 1868 in Tokyo, brother of the following; studied elect. chemistry at the Imp. Tokyo Univ.; was in the Furukawa Mining; toured abroad. Add. Yone-cho Kokura.

(カタヤマ・キンイチロウ、九州製作所社長、タカイ鋼業取締役兼技術責任者。1868年東京で出生。次に挙げる人物(カタヤマ・クニヨシ)の弟。東京帝国大学電気化学科を卒業後、古河鋳業所に入社。海外視察に行く。住所は小倉市米町。【拙訳】)¹⁸⁾

英語で Takai と書かれているのは Tokai の間違いで、東海鋼業のことである。なぜなら、『大正人名辞典』では、明治元年(1868)生まれの片山謹一郎は、「九州製作所、東海鋼業、日邦工業各取締役、工学士¹⁹⁾」と紹介されているからである。また卒業は電気化学科ではなく、電気工学科である²⁰⁾。

上記の2冊の本により、カタヤマ・キンイチロウの漢字名は片山謹一郎(1868-没不明)であると判明する。彼は静岡県人片山龍庵の三男として生まれ、医学博士片山国嘉の弟であり、1896年に東京帝国大学電気工学科を卒業すると、古河鋳業に入社して水電事業に従事するが、官立製作所が創設されると勅任を受けて、そこに移動する²¹⁾。その間、欧米各国を視察旅行する。退官後実業界に転じ、現横須賀酸水素(旧東海鋼業)、九州製作所の各社長を引き受け、東ボタン製作所の監査役も兼務する²²⁾。

片山謹一郎がグリム童話の翻訳を発表したのは1886年4月である。4月以前の彼の所属は第一高等学校予備門2級であった。彼は1886年9月から1887年3月まで「第一高等学校」の「予科第一級(獨)一之組」に所属している²³⁾。予科は上の学年に行くほど数字が小さくなるので、1級は最終学年に当たる。1884年に4級に入学した彼は²⁴⁾、1887年に予科を卒業し、1888年には「本科二部第一年一之組(工・理科)第一外国語英語・第二外国語ドイツ語」に在籍するが²⁵⁾、その後休学する。理由は不明である。1890年「本科二部第一年」に復学する²⁶⁾。1892年に東京帝国大学電気工学科に入学するが、1年生を2回繰り返す²⁷⁾、1896年に同学科を卒業する²⁸⁾。彼が帝大に入学したとき、13歳年上の兄、片山国嘉は法医学講座を担当する医学部の教授であった。国嘉も学費を兄の国棟(1871年死亡)に出してもらっていたので²⁹⁾、謹一郎の学費も国嘉が出していたのであろう。ドイツ留学中(1884-1888年)の国嘉の助教授の給与は3分の1になり³⁰⁾、経済的に厳しい状態が続いていた。1888年7月本科に入学した謹一郎が休学したのは、おそらく経済的な理由であろう。国嘉は10月末に帰国し、11月に教授に任命されるが³¹⁾、留学後の片山家は経済的苦境から脱するのに時間がかかったようだ。弟の復学は2年後の1890年7月になる。

2) 「MAME NO HANASHI」の記者 IMURA CHŪSUKE の漢字名と経歴

IMURA CHŪSUKE とは、1906年に新宿脳病院を設立した初代院長、井村忠介(1868-1927)のことである³²⁾。忠介は井村家の養子である。井村家は千葉の佐倉藩倉奉行で元々財産家であった³³⁾。忠介は1885年7月に県立千葉医学校に入学したが、1888年9月に同校が改組され第一高等中学校医学部となったので³⁴⁾、1889年7月に卒業したのは、第一高等学校医学部である。彼は第一期生として卒業している³⁵⁾。同年9月に帝国大学精神学科に選科入学し³⁶⁾、11月に医籍登録する。12月に法医学科選科にも兼留入学して³⁷⁾、1891年12月に精神病学教室補助の職につく³⁸⁾。帝大には医局がなく、実際の研修は巣鴨病院でしていたので、1892年2月には巣鴨病院嘱託となり、1893年9月に助手として入局する。1898年10月には国家医学講習会の精神病学講師になり、6年間教える。1904年に帝大を依願退職し、1906年に井村病院を創立する³⁹⁾。

彼は政治活動にも携わり、1920年に東京府医師会議員に選出され、日本精神病協会幹事になり、1922年には豊多摩郡代々幡町会議員、豊多摩群医師会副会長、町会議員を歴任し、1928年4月に死去するまで、井村病院院長として精神病患者の治療に全力を尽くす⁴⁰⁾。

井村は巣鴨病院では院長の呉秀三に師事していたが⁴¹⁾、呉院長が外遊中(1897-1901)は医長の片山国嘉が院長を代行した。片山国嘉が教授で、呉が助教授、井村が助手という関係にあり、井村は片山国嘉に教えを乞う立場にあった⁴²⁾。井村は榊俣が神経科の教授のときに、選科生として精神学科に在籍しながら、片山国嘉が教える法医学科にも在籍するという、2学科同時在籍を实践する意欲的な学生であった。榊教授だけでなく片山教授にも教えを乞う必要を感じたのであろう。片山国嘉にとっては直属ではないにしても、数少ない法医学科選科生として井村は記憶に残る学生であった。そのことは、片山国嘉が設置した「国家医学講習所」に井村が講師として採用されていることと⁴³⁾、片山の「法医学鑑定実例集」という論文に、井村が鑑定を書いていることから伺える⁴⁴⁾。

井村が巣鴨病院で師事した呉秀三は、「生来文学、歴史を好み、また名文家としても知られていた」⁴⁵⁾という。彼が学生時代に書いた『精神啓微』(1889)は優れた作品であり、斎藤茂吉が一高生の時に読んで感動したそうだ⁴⁶⁾。呉秀三は文学愛好者だったのである。その傾向は家系からも検証することができる。彼は日本で最初の絵本版グリム童話を訳出した、呉文聰の弟なのである。

4. 片山謹一郎と井村忠介に影響を与えた人物

1) 片山謹一郎の兄、片山国嘉

片山国嘉(1855-1931)は静岡県医師片山竜庵の次男で、1870年に16歳で上京し、「大学東校(東京

大学の前身)の小教授で同郷の足立寛(緒方洪庵の適塾で学び、軍医総監になった医師)の書生となって勉強を続け、翌年には大学東校に入学し⁴⁷⁾、住まいを寄宿舎に移す。彼の生活は東校で教えていた兄の国棟が支援していた。国棟は日本近代生理学の基礎を築いた著名な生理学者であったが、若くして逝去してしまう⁴⁸⁾。1879年、国嘉は日本初の医学士の1人として東京大学医学部を卒業すると同時に、外国人教授ティーゲル(Ernst Tiegel, 1849-1889)の生理学教室の助手になる⁴⁹⁾。ティーゲルの裁判医学講義を通訳しているうちに、法医学に対する造詣が深くなり、1881年に助教授になる⁵⁰⁾。ティーゲルやベルツ(Erwin von Bälz, 1849-1913)といったドイツ人教授から医学を学んだ国嘉は、ドイツ留学に憧れ、1884年に夢をかなえる。彼はベルリン大学で法医学をリーマン(Carl Liman, 1818-1891)に、精神医学をウェストファール(Carl Westphal, 1833-1890)に学ぶが、教え方に納得がいかず、オーストリアのウィーン大学に研究の拠点を移す。ホフマン(Eduard Ritter von Hofmann, 1875-1897)の下で法医学を学び、ようやく学問上の疑問点が解消する⁵¹⁾。4年間の留学を終えて1888年に帰国し、帝国大学医科大学教授となる⁵²⁾。裁判医学を法医学と改称し、「93年の講座制発足に際し法医学講座の初代教授として、日本における近代的法医学を樹立し、科学の力によって法の公正を保つようにした」人物といわれている⁵³⁾。

片山国嘉は法医学を定着させるため、法律の改正を提唱し、精神病患者が罪を犯した場合、罰則を軽減するよう提案している⁵⁴⁾。有名な「刑法三十九条における『心身喪失者ノ行為ハ之を罰セス。心身耗弱者ノ行為ハ其刑ヲ減刑ス』の一条は片山の発案による」⁵⁵⁾といわれている。このほかにも『精神病院法』(1919)という著書もあることから、「監獄に於ける精神病患者をいかに保護すべきか」という論文を書いている井村忠介は、片山教授の著書や仕事に一高生の頃から、関心を持っていたと思われる。

片山謹一郎と井村忠介がグリム童話の中から2話をローマ字訳したのは、国嘉がドイツ留学中の1886年と1887年であった。1888年にベルリンの写真館で撮影された19人の日本人医学者の記念写真には、森林太郎(森鷗外)とともに、片山国嘉も写真に納まっている⁵⁶⁾。森鷗外の息子、森於菟がグリム童話を1902年から1906年の間に15話も訳しており⁵⁷⁾、鷗外と国嘉は同時期に4年間ドイツに留学し、4か月間同じ船に乗っていただけでなく、ベルリン大学留学中には「鷗外にとって、片山は気軽に訪ねられる相手だった」⁵⁸⁾としたら、グリム童話に関する情報も共有していたと思われる。

1863年に亡くなったヤーコプ・グリム(Jacob Grimm, 1785-1863)はベルリン大学教授で慣習法と言語学に造詣が深かった。ベルリン大学に在学中、国嘉や鷗外はヤーコプ・グリムの業績について知っていたはずだ。なぜなら法医学というのは、犯罪人の行動を綴るの必要があり、噂や証言をもとに「話」としてまとめる必要があるからである。これは伝承や法律故事を書きとる作業に酷似している。軍医として渡独した森鷗外も「猶太教徒ノ裁判医学」、「法医ノ自由」、「希臘羅馬人ノ法医学」など数多くの法医学に関する論文を執筆している⁵⁹⁾。鷗外の息子もグリム童話を訳しているとなると、法医学とグリム童話の関係は看過できないものがあると思われる。

そのうえ国嘉は「ローマ字の普及に熱心であったから、禁酒誓約などもローマ字にして数種の本を作り、これを桐箱に納めて明治天皇に献上した」くらいである⁶⁰⁾。彼は独自のローマ字表記法まで開発し、『ローマ字の假名式綴り方』(1913年)を出版している。「驢馬字会」が設立された1884年12月には、国嘉はドイツ留学中で日本にはいなかった。だからこそ彼は弟の雑誌への翻訳投稿という形で、会への支援を表明したのではないだろうか。

2) ドイツ語教師・ルドルフ・レーマン

予備門では将来工学科に進む片山謹一郎は、ドイツ語を主とするクラスに所属しており、ドイツ語を熱心に勉強していた。この時期のドイツ語教師で特筆すべき人物は、ルドルフ・レーマン(Rudolf Lehmann, 1842-1914)である。彼はプロシア出身でカールスルーエ工科大学とオランダのライデン大学の「土木工学科で河海工業と土木工学を専攻し、卒業後はロッテルダム造船所に勤めた」技師である⁶¹⁾。1869年来日し、京都府にドイツ語教師ならびに建築技師として招かれ、欧学舎で教え、その後、1884年9月から1890年まで東京大学予備門で教える。その間、彼は1年間ドイツに一時帰国したので、

通算5年間予備門で教えたことになる⁶²⁾。彼の功績は日本初の『独和辞典』を1873年に、日本初の『和独対訳字林』を1877年に完成させたことである⁶³⁾。工学技士でありながら、彼は日本で最初の独和辞典と和独辞典を完成させたのである。片山謹一郎は東京大学予備門で、彼にドイツ語を習ったのである。

レーマンのドイツ語の「教え方は総合的であり、桃太郎や舌切り雀の物語があると、早速生徒にドイツ語訳をさせ、先生はそれを添削するとともに自ら日本のことを学んだ」という⁶⁴⁾。日本昔話を独訳させたのなら、西洋昔話であるグリム童話も和訳させたのかもしれない。その際、和訳は彼が点検できるよう、ローマ字でさせたのではないだろうか。もし、そうだとしたら、片山が『ROMAJI ZASSI』に投稿したのは、レーマンの授業で出された課題であったのかもしれない。課題ではなく自主的な行動であったとしても、西洋と日本の昔話に興味を抱かせ、翻訳して子どもに伝える必要があると生徒が考えるようになったのは、レーマンの昔話を取り入れるドイツ語教授法があったからであろう。

井村については誰にドイツ語を習ったのか正確なことはわからない。当時、医学や工学を志す者は、ドイツ語を学びドイツの学問的知識を吸収しようとした。片山訳が掲載された1886年4月以前は、片山は第一高等学校予備門2級の学生であった。井村訳が掲載された1887年6月以前は、井村は県立千葉医学校の2年生であった。千葉医学校は1887年7月から改組されて第一高等中学校医学部になるが、翻訳した当時は、彼は県立千葉医学校の学生であった。1885年から1887年までの千葉医学校の時間割は、図書館にも医学部に保存されていない。それゆえ、1886年から1887年の第一高等中学校のものを参考にするしかない。そこではドイツ語はルドルフ・レーマン、寺田勇吉、高木計、吉田健次郎、山口小太郎、川島蔵吉、福島鳳一郎の7人が教えている⁶⁵⁾。おそらく井村もレーマンやこれらの日本人教師からドイツ語を学んだのであろう。

日本の医学は、ドイツから導入することが決められたので、医学用語はガーゼ、カルテ、ギプス、ケロイド、クランケなどのドイツ語がそのまま日本語として使用されている。千葉医学校では精神病学は眼科学教室が担当しており、1884年6月から1901年まで荻生録造が教えていた。彼はドイツ医学を学び、後にドイツに留学した人である⁶⁶⁾。1870年、政府がドイツ医学の採用を決定したとき、11名の青年医師がドイツに派遣された⁶⁷⁾。彼らは帰国後、医学校の先生となり、ドイツのテキスト、医薬品、医療器具を使って、ドイツ医学を教えた⁶⁸⁾。それゆえ、医学校ではドイツ語が必修とされてきたのである。将来、精神医学に携わる者として、井村はドイツ語を熱心に学んだと思われる。

上記の理由から、2人が訳したのは、ドイツ語からであり、英語からの重訳ではないと考えられる。

3) 中川重麗(霞城)

中川重麗(1850-1917)は霞城という筆名で、明治期に9話のグリム童話を翻訳している。彼はこのほかに霞翁、西翁、柴明、四明など数多くの「号」(呼び名)を用いている⁶⁹⁾。1889年から1893年の間にグリム童話6話⁷⁰⁾を雑誌『小国民』に連載している。さらに1896年には3話⁷¹⁾を『少国民』と改字された雑誌に連載している。すべて中川の翻訳である⁷²⁾。中川は文系だけでなく、理系の学問にも造詣が深く、化学、薬学、物理学、鉱物学など科学系の話も紹介している。しかし、文学翻訳者として以外の中川の実像については、これまで詳しく紹介されてこなかった。

今回、レーマンについて調査していると意外な事実が判明した。中川重麗は上記のルドルフ・レーマンに薫陶を受けた人々が結成した「レーマン会」の発起人だったのである⁷³⁾。彼は京都に生まれ、英語、理化学、鉱物学、植物学、製薬学など様々な学問を学んでから、1877年1月から1880年まで原口隆造についてドイツ語を学ぶ⁷⁴⁾。原口隆造は欧学舎(独逸学校)でルドルフ・レーマンからドイツ語を学んだ人である⁷⁵⁾。中川は1879年から京都の師範学校の助教としてドイツ語や化学を教えてから、1884年9月から東京大学予備門御用掛教員となり、11月には医学予備校嘱託になる。1885年9月からは東京大学予備門教諭に、1886年5月には第一高等中学校教諭となったが、6月には退職して、大阪で著述業に従事し、その後、大阪朝日新聞や日出(京都)新聞の編集者になる。その後、京都市立美術工芸学校などで嘱託講師をしながら、巖谷小波らと交友を結び、文筆活動にも力を注いだのである⁷⁶⁾。彼は1884年9月から1886年5月まで、東京大学予備門や医学予備校でドイツ語や化学を教えている。つまり、

ルドルフ・レーマンが教えていた時期に、中川重麗は片山や井村にドイツ語を教えていたのである。彼がレーマン会の発起人になり、レーマンが作った独逸学校(京都薬科大学)の最初の校主であり、創立以来の功労者であるのは、レーマンとこの時期に親しく交流していたからであろう。

片山謹一郎が学んでいた予備門と、井村忠介が学んでいた医学予備校の両方で、中川重麗はドイツ語を教えていたのである。学校を退職して文筆業に専念してから、中川が数多くのグリム童話を翻訳したことを考えると、片山と井村がグリム童話をローマ字訳しようと思った動機は、ルドルフ・レーマンの昔話教授法にだけあるのではなく、中川重麗の教授法にもあったのではないだろうか。なお、レーマン会の発起人には、東京外国語学校教諭の水野繁太郎も名を連ねている⁷⁷⁾。そして、彼も1909年に「雪姫」(KHM53)と「兄と妹」(KHM15)を翻訳している⁷⁸⁾。レーマン会の会員は、グリム童話翻訳に携わる人が多いようである。

4) 呉秀三の兄、呉文聰について

1887年9月にグリム童話(KHM5)「狼と7匹の子山羊」の仕掛け絵本『八ツ山羊』を訳した統計学者、呉文聰には5人の兄弟姉妹がいるが、男兄弟は末子の秀三のみである⁷⁹⁾。秀三が15歳のときに父親の呉黄石が逝去したので、兄文聰が世帯主として、14歳年下の秀三の面倒をみたのである⁸⁰⁾。

文聰の『八ツ山羊』が出た1887年は、秀三は大学生(1890年東大卒)で同じ家に住んでいた。当然、兄の絵本を熟知していたはずだ。呉秀三は上田万年と同じ時期に帝大の大学院生であった。このころは大学院生が全学部で50人弱しかおらず、文学好きの秀三は、兄と同じ「狼と七匹の子山羊」を訳した上田万年とも面識があったと思われる。

呉文聰が訳した『八ツ山羊』が、英語からの重訳ではなく、挿絵がドイツ人挿絵画家ハインリッヒ・ロイテマン(Heinrich Leutemann, 1824-1905)のものであることが、最近の研究で明らかにされた⁸¹⁾。ドイツ語の本である『ドイツの子どもの童話集』(Deutsche Kinder-Märchen. Heinrich Leutemann Stuttgart Leipzig 1884)から挿絵を拝借したということは、英語ではなくドイツ語から訳したものと考えられる。統計学の優れた文献は、主としてドイツ語で書かれているということを知り、呉文聰は1886年から一念発起してドイツ語を猛勉強する。山口弘一(国際法学者)に個人教授を依頼して、通信省で働きながら自習したのである⁸²⁾。『八ツ山羊』の出版は1887年9月であるから、1年間でドイツ語を修得してドイツ語本を訳したことになる。2年後の1889年には、彼はワッペウス(Johann Eduard Wappäus, 1812-1879)の『統計学論』(Einleitung in das Studium der Statistik)をドイツ語原書から翻訳している⁸³⁾。しかし、英語からの重訳である可能性も皆無ではない。なぜなら、ロイテマンの挿絵が入った『ドイツの子どもの童話集』ではこの話の題名は原典同様「狼と七匹の子山羊」となっているからである。『八ツ山羊』という題名の出所が、使用された英訳本にあるのかもしれないので、1886年までに出版された7種類の英訳本を調査してみたが⁸⁴⁾、子山羊の数を8匹と表示した本はなかった。この本は縮緬本の日本昔話シリーズで有名な長谷川武次郎の弘文社から、西洋昔話第1号として出版されたもので、第2号にはアンデルセン童話が予定されていた⁸⁵⁾。しかし、1号が売れなかったので、2号が出せなかったようだ。米が1升7錢3里8毛、製造業の労賃が1日男子21錢、女子10錢であった頃(1887年)⁸⁶⁾、子ども用の絵本を10錢も出して買う購読者はいなかったのである。これまで英訳本からの重訳とされてきたこの本は、上記の理由からドイツ語から翻訳された可能性が高いといえる。

5. 「日本驢馬字会」の成立と意義

もう1つの要素は「日本驢馬字会」である。1884年12月2日「同志の人々七十餘名が始めて東京大學物理學教室に集り、寺尾壽博士を議長に推し、種々相談を重ねた結果、愈『羅馬字會』を起こすと云うことに衆議は一致した」のである⁸⁷⁾。外山正一帝大文科大学長が祝辞と激励を兼ねた演説をし、「假名とローマ字と互に相提携して、協同一致、漢字の大敵に當るべき⁸⁸⁾と力説する。彼は矢田部良吉(植物学教授)とともに、これまで反目していた大槻文彦らの「かなのくわい」と、「廢漢字」という点で協力体制を敷き、

漢字を覚える労力を省こうと、「小学教育にローマ字を採用する」よう働きかけたのである⁸⁹⁾。1885年3月7日にヘボン式を改良した「ローマ字会式綴字法」が決められ、4月に『羅馬字にて日本語の書き方』として発表される⁹⁰⁾。そして、ローマ字を普及する手段として『RŌMAJI ZASSI』第1冊1号が6月に発行される。

片山謹一郎はその第1冊11号(1886年4月11日)、井村は第2冊25号(1887年6月10日)の「子どものため」欄にグリム童話を1話ずつ訳出している。ローマ字会式綴字法を決める際に40人の「書き方取り調べ委員」が選出されたが、その中で最も熱心に五十音韻式を主張したのが、田中館愛橋であった⁹¹⁾。田中館は当時、帝大理学部物理学科の助教授であり、電気計測器などに取り組んでいたことを考えると、東京大学予備門で電気工学科進学を目指していた片山謹一郎が雑誌に投稿したのは、「ローマ字普及の父」と言われる田中館愛橋や、同じ静岡県出身の学長、外山正一などの影響もあったのかもしれない。

片山と井村が東京大学予備門や千葉大学医学部で学んでいたとき、多くの外国人教師や日本人教授は相互の意思疎通を図るには、日本語をローマ字で書く必要があると痛感していた。イギリス人チェンバーレン(B.H. Chamberlain, 1850-1935)だけでなく、アメリカ人牧師ヘボン(James C. Hepburn, 1815-1911)や技師サミュエル・ヴラウン(Samuel Brown, 1810-1890)も熱心なローマ字論者であった⁹²⁾。それゆえ、医学、法学、工学などの学問的知識を海外から導入しようとする学者、研究者、技術者、学生などが、この会の主たる会員になったのである。ティーゲルやレーマンに日本語を伝えるとき、ローマ字で書いて教えた経験を持つ人々は、日本文化を世界に発信するには、ローマ字の導入が不可欠であると考えていたのである。

「日本驢馬字会」の会員には上田万年も名を連ねており、彼は会長の「田中館愛橋とはベルリン留学中旧知の仲」⁹³⁾であった。上田は日本語を世界的言語にするためには、ローマ字の導入が不可欠であるとして、ローマ字の国際性を高く評価している⁹⁴⁾。

上田は1889年にグリム童話KHM5「狼と七匹の子山羊」を英語から重訳し、『おほかみ』という題名で言文一致の仮名文字を使い、着物姿の動物の挿絵を入れた絵本を出している⁹⁵⁾。樋口勤次郎もまた会員に名を連ねている。彼は1898年にグリム童話を2話(KHM5, 153)翻訳しただけでなく、グリム童話を小学校教科書に取り入れて教育的に利用すべきであると主張した人である⁹⁶⁾。

片山国嘉はティーゲルの助手として生理学の授業を通訳していたが、医学の授業で困ったのは漢字混じりの日本語文の説明と、実験設備の不備であった。実験を重んじるティーゲルはガラスの代わりに竹を使って実験器具を自ら製造したという⁹⁷⁾。機械や電気技術の獲得が医学の実験に不可欠であったのだ。国嘉の体験談は謹一郎の進路選択に影響を与えたのではないだろうか。医家の三男である謹一郎が、医学ではなく電気工学を選択した背景には医学実験室での兄の苦労話があったように思える。

6. 結論

片山謹一郎は東京大学予備門、井村忠介はや千葉医学校の生徒のころに、グリム童話をローマ字で訳している。つまり帝国大学に入る前段階の学校の生徒であった頃の仕事ということになる。19歳や20歳の青年であった彼らが学んだ外国語は、主としてドイツ語であった。1883年以降、東京帝国大学文学部では「英人、米人が完全にいなくなり、全くドイツ人のみ」になり、理学部では英米人教師もいたが、ドイツ人教師の増加が著しかった⁹⁸⁾。医学部や工学部の「教育や医療が主としてドイツ人教師医師によって」行われていたため⁹⁹⁾、予備門や医学部ではドイツ語を学ぶ必要があったのだ。

帝国大学電気工学科への入学を希望していた片山謹一郎は、ドイツ人の教授から工学を学ぶ必要があったし、精神医学の修得を目指していた井村もドイツ語を学ばねばならなかった。それゆえ、片山と井村が『RŌMAJI ZASSI』に訳出したグリム童話2話は、英語訳からの重訳ではなく、ドイツ語からの直訳であると判断することができる。井村訳より片山訳の方が原文に忠実な訳であるのは、両者のドイツ語力が反映しているからであろう。予備門でのドイツ語教育はそれだけ水準が高かったのである。

1886年に1話(KHM152「牧童」)、1887年に2話(KHM18「藁と炭とそら豆」、KHM5「狼と7匹の子山羊」)訳されたグリム童話の最初の3話の邦訳は、いずれもドイツ語から訳されたものである。その背景にはルドルフ・レーマンや中川重麗という民話に興味をもつドイツ語教師の熱心な指導と、片山国嘉や呉秀三という法医学や精神医学に携わる医師の影響があったと思われる。

理工学や法医学の関係からの選択であるからこそ、宇宙の謎に答える羊飼いの童の見事な答え、怯えから命を落とす炭の顛末や、他人の不幸を嘲笑う豆の天罰などが描かれた話が、真っ先に紹介されたのであろう。

心の「怯え」を体の「重さ」に変えたということは、恐怖心を持つ存在から、重さを判断する能力が欠如した存在に変えられたことを意味する。恐怖心の克服が命を救い、判断力の欠如が命を落とすのは、精神医学から見ても興味深い話である。そのうえ仲間の豆はその状態を見ても助けようとせず、ただ笑っているだけである。他人の不幸を嘲笑う行為によって自らの身を亡ぼしてしまうが、幸運にも医者の手術で一命を取り戻す。

精神医学を志す井村にとっては、他人の不幸を嘲笑い、天罰を受けたような場合でも、精神病患者の命を救うのが医者への使命である、ということを経験に銘じる話ではないだろうか。仕立屋を医者に変えたのは、医者になる自分の身に置き換えたからではないだろうか。明治期の他の訳本ではこの箇所は変更されず、「裁縫師」(渋谷保訳1891)や、「仕立屋」(木村小舟訳1908)と訳されている¹⁰⁾。命を取り戻した豆には黒い筋をつけて、腹黒さが目立つようにしたのが、せめてもの天罰であろう。

宇宙の謎についての問いに見事に答える羊飼いの子に王は感心して、約束通り彼を養子にして王家を継がせるといふ話には、身分が固定された封建制を打ち破り、知識がある者に指導者としての地位を与える立憲君主の姿と、知識が身を立てるという立身出世の思想が見事に体现されている。

現在では知名度の低いこの2話は、明治期の人にとっては示唆に富む話として興味を引くものであった。英語からではなくドイツ語からの直訳であるという点と、最初の日本語訳であるという点で、ローマ字訳の2話は特筆すべき存在といえることができる。

注

- 1) 松山棟庵が『サンゼルト氏第三リイドル』(1873)で、深間内基が『啓蒙修身録』(1873)でグリム童話184番「釘」を文語体で邦訳している。詳細は右記参照。拙著「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容」大野寿子編『カラー図説 グリムへの扉』勉誠出版、東京、pp.210-241(2015)
- 2) 川戸道昭「グリム童話の発見」川戸道昭・野口芳子・榊原貴教編『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター、東京、pp.6, 16-19(2000)
- 3) グリム童話集 *Kinder- und Hausmärchen* は KHM と略し、その後に決定版の番号を入れて表示する。
- 4) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Heinz Rölleke. Reclam, Stuttgart, vol. 2, pp.268-269 (1980).
- 5) Ibid. p.268 (1980).
- 6) Katayama Kin-ichirō 訳『RÖMAJI ZASSHI』1冊11号(4月10日)、p.97(1886)
- 7) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Heinz Rölleke, op. cit. vol.2, p.268 (1980)
- 8) Katayama, Kin-ichirō 訳、前掲書6)、p.98(1886)
- 9) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Hans-Jörg Uther, Diederichs, München, vol.4, p.283 (1996)
- 10) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Heinz Rölleke, op. cit. vol.3, pp.152-153 (1980)
- 11) Ibid. vol.1, pp.117-118 (1980)
- 12) Ibid. vol.2, pp.268-269 (1980)
- 13) Imura Chūsuke 訳『RÖMAJI ZASSHI』2冊25号(6月10日)、p.70(1887)
- 14) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Hans-Jörg Uther, op. cit. vol. 4, p.38 (1996)
- 15) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Heinz Rölleke, op. cit. vol.3, p.37 (1980)
- 16) Brüder Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*, ed. by Hans-Jörg Uther, op. cit. vol.4, pp.38-39 (1980)

- 17) 川戸道昭, 前掲書 2), p.19 (2000)
- 18) *The Japanese Year Book. 1921-22.* Tokyo, The Japan Year Book Office, Tokyo, pp. 694-695 (1921)
- 19) 猪野三郎編『大正人名事典Ⅱ』日本図書センター, 東京, 上巻, p.88 (1989)
- 20) 明治 26 年の東京大学在学者名簿では片山謹一郎は大学電気工学科に在籍している。『東京帝国大学一覧明治 26-27 年』東京帝国大学, 東京, p.317 (1894)
- 21) 猪野三郎編, 前掲書 19), p.88 (1989).
- 22) 中西利八編『日本産業人名資料辞典Ⅱ』日本図書センター, 東京, vol.1, p.69 (2002)
- 23) 『第一高等中学校一覧 明治 19-20 年』第一高等中学校, 東京, p.78 (1887)
- 24) 『第一高等中学校一覧 明治 23-24 年』第一高等中学校, 東京, p.78 (1891)
- 25) 『第一高等中学校一覧 明治 21-22 年』第一高等中学校, 東京, p. 84 (1889)
- 26) 『第一高等中学校一覧 明治 23-24 年』第一高等中学校, 東京, p. 91 (1891)
- 27) 『東京帝国大学一覧 明治 25-26 年』東京帝国大学, 東京, p.314 (1892). 『東京帝国大学一覧 明治 26-27 年』東京帝国大学, 東京, p.317 (1894). 両方の名簿に 1 年生として片山謹一郎の名前がある。
- 28) 『東京帝国大学一覧 明治 29-30 年』東京帝国大学, 東京, p.317 (1896)
- 29) 武智ゆり「法医学の基礎を築いた片山国嘉」, 近代日本の創造史懇話会編『近代日本の創造史』近代日本の創造史懇話会, 東京, p.30 (2011)
- 30) 小澤舜次『法医学始祖片山国嘉』新人物往来社, 東京, p.99 (1975)
- 31) 同上, p.100 (1975)
- 32) 田辺子男他編『東京の私立精神病院史』牧野出版, 東京, p.114 (1978)
- 33) 同上, p.118 (1978)
- 34) 『千葉大学三十年史』千葉大学, 千葉, pp.1426-1432 (1980)
- 35) 『第一高等中学校医学部一覧 明治 25-26 年』第一高等中学校医学部, 東京, p.49 (1893)
- 36) 田辺子男他編, 前掲書 32), p.114. 『東京帝国大学一覧 明治 22-23 年』東京帝国大学, 東京, p.237 (1889)
- 37) 田辺子男他編, 前掲書 32), p.114. 『第一高等中学校一覧 明治 23-24 年』前掲書 24), p.288 (1891)
- 38) 田辺子男他編, 前掲書 32), p.115 (1978)
- 39) 同上
- 40) 同上
- 41) 同上
- 42) 『東京大学精神医学教室 120 年』新興医学出版, 東京, p.20 (2007)
- 43) 小澤舜次, 前掲書 30), p.47 (1975)
- 44) 田辺子男他編, 前掲書 32), p.314 (1978)
- 45) 『東京大学精神医学教室 120 年』前掲書 42), p.49 (2007)
- 46) 同上
- 47) 武智ゆり, 前掲書 29), p.30 (2011)
- 48) 同上
- 49) 同上, p.31 (2011)
- 50) 中西利八編, 前掲書 22), p.69 (2002)
- 51) 小澤舜次, 前掲書 30), pp.44-47 (1975)
- 52) 武智ゆり, 前掲書 29), p.31 (2011)
- 53) 同上
- 54) 山崎光夫『明治二十一年六月三日一鵬外「ベルリン写真」の謎を解く』講談社, 東京, p.139 (2012)
- 55) 同上
- 56) 同上, pp.8-10 (2012)
- 57) KHM52「ツグミ髭の王」, KHM15「ヘンゼルとグレーテル」, KHM105「蛇と鈴蛙の話」, KHM55「ルンベルシュティルツヒェン」, KHM50「いばら姫」, KHM153「星の銀貨」, KHM80「雌鶏の死」, KHM94「賢い百姓娘」,

- KHM3「マリアの子」, KHM117「わがままな子」, KHM151「ものぐさ3人兄弟」, KHM27「ブレーメンの音楽隊」, KHM1「蛙の王さま」, KHM53「白雪姫」, KHM83「幸せなハンス」の15話。川戸道昭・野口芳子・榎原貴教編「グリム童話翻訳文学年表1 明治編」『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター, 東京, pp.141-147 (2000)
- 58) 山崎光夫, 前掲書 54), pp.16, 137 (2012)
- 59) 同上, p.139 (2012)
- 60) 小澤舜次, 前掲書 30), p.6 (1975)
- 61) 『京都薬科大学百年史』京都薬科大学, 京都, p.18 (1985)
- 62) 武内博『来日西洋人名事典』日外アソシエーツ, 東京, p.555 (1995)
- 63) 同上
- 64) 三好卯三郎「ルドルフ・レーマンと京都薬学事始」『薬史学雑誌』vol.22-1, p.3 (1989)
- 65) 『第一高等中学校一覽 明治19-20年』第一高等中学校, 東京, pp.56-61 (1887)
- 66) 『千葉大学医学部八十五年史』千葉大学医学部八十五周年記念会, 千葉, pp.490-491 (1964)
- 67) ジョン・Z・バワーズ著, 金久卓也他訳『日本における西洋医学の先駆者たち』慶応義塾大学出版会, 東京, p.245 (1998)
- 68) 同上, pp.260-262 (1998)
- 69) 上田信道『少年文武』創刊号から見た中川霞城の業績』『翻訳と歴史』, ナダ出版センター, 東京, vol.6, p.4 (2001)
- 70) 1889年 KHM5「狼と7匹の子山羊」, 1890年 KHM53「白雪姫」, 1892年 KHM83「幸せなハンス」と KHM37「親指小僧」, 1893年 KHM27「ブレーメンの音楽隊」と KHM45「親指太郎の旅」の6話。
- 71) KHM69「ヨリンデとヨリンゲル」, KHM1「蛙の王様」, KHM25「7羽のカラス」の3話。
- 72) 川戸道昭・野口芳子・榎原貴教編「グリム童話翻訳文学年表1 明治編」前掲書 57), pp.130-135 (2000)
- 73) 『京都薬科大学百年史』, 前掲書 61), pp.25-26 (1985)
- 74) 同上
- 75) 同上, p.24 (1985)
- 76) 同上, pp.25-26 (1985)
- 77) 手塚竜磨『日本近代化の先駆者たち』吾妻書房, 東京, p.123 (1975)
- 78) 水野繁太郎・権田保之助共訳「雪姫、兄と妹」『ドイツ文学証書第2編』小川尚栄同, 東京(1909)
- 79) 呉博士伝記編纂会『呉秀三小伝』創造出版, 東京, pp.13-15 (2001)
- 80) 呉健編『呉文聰』杏林舎, 東京, pp.79, 214 (1920)
- 81) 西口裕子「本邦初のグリム童話の翻訳絵本『八ツ山羊』とその影響を与えたとみられるドイツの挿絵について」『専修大学人文科学研究所月報』vol. 257, pp.17-33 (2012)
- 82) 呉健編, 前掲書 80), pp.70, 226 (1920)
- 83) 同上, p.151. ヨハン・エドゥアルド・ワッペウス著, 呉文聰訳『統計学論』博聞社, 東京(1889)
- 84) 1886年までに KHM5 を英訳している本: 1. Household Stories (Added ed. 1853), 2. Household Stories (Bogue ed.1857), 3. Matilda Davis, Home Stories (1855), 4. Grimm's Goblins (George Vickers ed. 1861), 5. Mrs. H. H. B. Paull, Grimms' Fairy Tales (1872), 6. Lucy Crane, Household Stories (1882), 7. Margaret Hunt, Grimm's, Household Tales (1884). 詳細は下記参照: Martin Sutton, *The Sin-Complex*. Kassel, Brüder Grimm-Gesellschaft, pp.311-312 (1996)
- 85) 川戸道昭, 前掲書 2), p.30 (2000)
- 86) 大川一司他「物価」経済新報社編『長期経済統計』経済新報社, 東京, pp.153-154, 243 (1967)
- 87) 川副佳一郎『日本ローマ字史』岡村書店, 東京, p.159 (1922)
- 88) 同上
- 89) 同上, p.64 (1922)
- 90) 同上, p.161 (1922)
- 91) 同上, p.160 (1922)
- 92) 同上, pp.57-58, 60 (1922)

(野口)

- 93) 富家素子「上田万年覚書」『新朝』新潮社, 東京, vol. 95-5, p.220 (1998)
- 94) 川副佳一郎, 前掲書 87), p.70 (1922)
- 95) 詳細は右記参照. 拙著『グリムのメルヒェン —その夢と現実』勁草書房, 東京, pp.140-143 (1994)
- 96) 同上, pp.151-156 (1994). 川戸道昭・野口芳子・榊原貴教編, 前掲書 2), pp.136-137 (2000)
- 97) 小関恒雄「御雇教師エルンスト・チーゲル I」『日本医史学雑誌』vol.27-2, p.114 (1981)
- 98) 『東京大学百年史』東京大学出版会, 東京, p.458 (1884)
- 99) 田辺子男他編, 前掲書 32), p.18 (1978)
- 100) 渋江保訳『西洋妖怪奇談』博文堂, 東京, p.218 (1891). 木村小舟訳『教育お伽噺』博文館, 東京, p.77 (1908)

受稿日 2015年9月17日 受理日 2015年11月5日